



部会でまとめた冊子を見ながら、福井豪雨での支援活動を振り返る間脇教諭（福井市成和中心）

福井豪雨で活動

「養護教諭サポート隊」は、福井豪雨から十一日後の昨年七月二十九日に発足した。県内の小学校から高校までの養護教諭でつくる県学校保健会養護教諭部会が母体になって会員らに協力を呼び掛け、同二十九日から八月二十日までの間に延べ百八人が活動した。被災した子供を通う美山町、今立町、福井市

全国へ配布、反響

の計六小学校に、二、三人のグループで訪問。子供たちと遊んだり、話を聞いたりしながら一緒に過ごした。現状を把握するため、一番最初に子供たちや学校の様子を見て回った同部会の

「養護教諭サポート隊」

莫大な被害をもたらした福井豪雨。被災した子供たちの心をケアしようと、県内の養護教諭らは「サポート隊」を結成し、精力的な支援活動を展開した。このほど、この活動の経過をまとめた報告書を作成。「自分たちの経験を役立ててほしい」と全国に配布し、反響を呼んでいる。

子供の心ケア 経験を冊子に

悩みや課題詳しく

悲惨な体験だったが、これを次への教訓にしよう。その後同部会の役員らが三カ月がかりで報告書「心のケアにかかわる養護教諭の支援活動」をまとめた。報告書にはサポート隊結成の経過、派遣システム、支援活動の実際、活動の評価と課題など、参加した教諭が直面した悩みなども詳しく書き込んだ。

「心身の不調を現した児

連絡が寄せられ、サポート隊の活動が全国に広がっている。福井豪雨から一年が経過。一見元氣そうでもまだ心に傷を残している子もいて、引き続き見守っていくことが必要という。間脇教諭は「今後は今回のような自然災害だけでなく、事件・事故に直面した場合などにも広げ、子供の心の問題を考えていきたい」と話している。

間脇真澄会長（成和中養護教諭）は「倒壊した家の前に、まずは元の生活を取り戻すことにみんな必死だった。子供たちのケアは遅れがちな中で、私たちが動かなければと思った」という。文部科学省が出しているマニュアルを読むところから始め、現場の先生たちの声、県教委と連絡を取り合いながらやれることを見つけていった。中には手作りのゲームや紙芝居などを持参したり、子供たちに手品を披露したり、プールに連れて行ったりすることもあった。ストレスから持病を悪化させる予を専門機関につなぐのも重要な仕事だった。「初任地の学校だから役に立たない」と遠方から駆け付ける教諭、嶺南地域から美山町まで片道三時間近くかけてやって来た教諭もいたという。

児童生徒が災害によるものが、どこかの見極めは難しい。「災害直後に近隣の養護教諭が駆け付け、被災校の養護教諭の支えとなりながら、被災地のニーズを把握し組織につなげる活動ができるように」と、経験者なごほうの意見が拳がっている。間脇教諭は「実は昭和三十三年の福井地震のときに、養護教諭たちが力を結集して活動を行った記録が残っていたのを見て、奮起した。実際現場に出てみて、養護教諭であるからこそできることがあると実感できたのではないかと振り返る。また、自分たちの経験を、中越地震の発生した新潟県の養護教諭にも伝え、報告書を全国の自治体などに送付したことで、おれの手紙のほか、今後の参考のためにもっと送ってほしいとの